徳島線

徳島線は吉野川南岸に沿って徳島県を東西に徳島駅と阿波池田駅を結ぶ路線として敷設されました（ＪＲ四国では佃駅から佐古駅に至る 67.5km を徳島線としています)。徳島県は吉野川流域を中心に発展してきましたので、徳島市から最初の鉄道が吉野川に沿って敷設されたのは当然のことのように思われます。

明治 20 年代の私設鉄道敷設ブームの中で、徳島鉄道株式会社が創立されたのは明治 29 年でした。起業目論見書によると、徳島市寺島町を起点に石井、牛島を経て川田村（現吉野川市）に至る 33.7km に鉄道を敷設しようとするものでした。明治 30 年に徳島～鴨島間 18.9km を第 1 期工事として起工し、徳島～鴨島間は明治 32 年に開業しました。続いて鴨島～川田間の第 2 期工事に入り、明治 32 年に鴨島～川島間と川島～山崎間が、明治 33 年に山崎～船戸間が開業して、徳島と船戸の間が鉄道で結ばれました。

明治 33 年に徳島県師範学校の教諭が作詞、作曲した「徳島鉄道唱歌」には沿線の風景や地名、駅名が取り入れられています。唱歌は 1 節から 30 節までありますが、最初の節だけ紹介しましょう。「黒煙空にたなびけば　汽笛の声も勇しく　はや寺島を離れたり　渭津の城をあとにみて」

当時の汽車は貨車と客車の混合で、駅ごとに貨物の積みおろしが行われるため停車時間も長く、その上速度が時速 20km 程度だったとのことで、今からすると悠長な感じがします。鉄道が敷かれ、駅が開業すると、多くの人が遠方から弁当持参で集まり、汽車の発着ごとに歓呼の声をあげたと伝えられています。

旅客や貨物の輸送により県西部の発展に貢献していた徳島鉄道は、明治 40 年に鉄道国有法により政府に買収され、徳島～船戸間は国鉄徳島線となりました。国有後、政府はこの徳島線を延長して、鉄道敷設法に明示されていた「香川県下琴平ヨリ高知県下高知ヲ経テ須崎ニ至ル鉄道」（現在の土讃線）に接続させるため、川田～阿波池田間の建設を計画し、明治 45 年に起工、大正 3 年に池田駅へ達して徳島線が全通しました。この時、起点付近の新線上に川田駅を新設し、従来の船戸駅を廃しました。

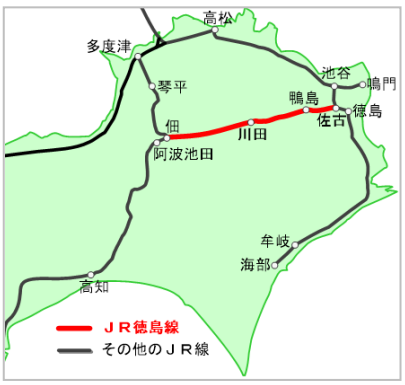
鉄道開通以前は、物資輸送は主に吉野川の舟運に委ねられていましたが、鉄道の開通により川船はやがて完全に駆逐されました。また、車馬舟運に頼っていた吉野川流域の人々の移動にも鉄道が利用されるようになり、人々が集散する場所は、川岸に栄えていた津から鉄道の駅に取って代わられるようになりました。

＜参考文献：四国鉄道 75 年史編さん委員会編「四国鉄道 75 年史」1965 年、徳島県史編さん委員会編「徳島県史第五巻」1966 年、徳島市史編さん室編「徳島市史第三巻」1983 年、川島町史編集委員会編「川島町史下巻」1982 年など＞

徳島駅ホーム

佐古駅

鴨島駅



川田駅

佃駅

阿波池田駅ホーム